諧附

稽義附合淫詞

全

序

明治十年五月　桃支庵指直

桃支庵指直纂述
甚角堂永機校正

一妙を得ての本ふみつまる　　箱

裳白を引ゆる乃ふ一峰にて春の視界

ゆる風なめをとふ一妙を

本のそのもとしても吹ちらしあとの志つめの

ちるさくらかな一句の玄眼

ともいふ乃ふまた弁源の経ともいふ眼乃

外方に弁源走附翁附近附近と程この

景色ともにおのれの身も浪もへこの風照

裳白のまゝにうつるをも心浄へ

股引の裾のうつぬきて　几北

風の吹本ぬかの敷やうに出してこの人のさまを白

寺三伸をこそ春一

程をおとしたる梅子（マイラド）に答ふ

小説るをくの風を伸ぶ　箱

梅子に答ふ

程をおとしたる山里の新をは梅子に答ふ

うら伝信原小家事あて山里の酔ふ月の

山を信一ぱのうて帰さ句をおふまあて裳白よま

梅うよのそをこそ程をうに眼

をはさむ時その前句ふあうと訓御向八裳

白の原をもとの筆にて裳白ぬかの姿をこそ出

人まちえてそ
名部屋の秋まつ　末
名部屋の秋の秋まつ　秋雪
書たのしむ書画をそ　邦
前句を梨まそ楽しむ人のうくそ
はまさんのおめでたのそ　北
前句梅の時それをそんそ
遊遊歌楽の人乃會（ラヒ）紙（メリヤス）おしのそ　末
前句乃そ紀んよまそ
そ部屋」変化の秋そ

里そそ和て年よ見婦く　箱
前句成行者とそそ
年時よ吹見そ　ラ
ここそまれそつしよの
句の里そそ和て一句そ
前そ三句目そ展そ
附句そそおそのそひそ
展そそ

かつまそ古年の藤蔭の右たるく　北
三服時ラ井柄そ部そ

湖水の秋　乃

湖水の秋乃

柴田是真

若白北陽亭の梅を題せし

若白北陽亭の梅を題せし　郁

若白乃君ハ旅人ニ

若白乃君ハ旅人ニ　北

若白乃君ハ旅人ニ　箱

畑の白ひのきそ枝豆の
都よりまゐりしことを
門こまを井添そも

二十年仲こそもなれ穂ぬ出て　去来
昇給ふ日の田家のさはこ一升　芭蕉

一反井まくうえ一枚　兆
田草取やすみ時もなくて
なすこうまは鞭こいまもなし

此節八郎兵衛不自由
居給しを一蛇当一節と云を指
なのりこ云ふ和尚

唐土にふもと服気　来
語まるこを人のひめこと
まる方言も

なのむふ達者こ百屋　兆
妻を服気さ一ぬる人
たるまゐをひの弱を人こまと虚実を
扱ひこ改こて百化の活法

五月の雨こにぬ焼ゆけを　箱
埋了おこまて旅こて
ぬ焼とりまの良者もせ一ぬもそ
茶の湯の秋ぬ焼もとりまる後あと

送んの歩みを
り橋の消てなきを
たるまでも一首
恋の若乃葉そ
んもとの一侍
蛇もとゐのもの

紙の七尾乃
送んせ一首
幸若をすそ
七尾小海の
もの

[illegible]
[illegible]
[illegible]

丁兒ふるくも面にたゝまつる
をり物の歌ゆゑ五條の
歌をこゝに
天王寺
浮圖にあるまゝの
すゝきにかゝるつゆ
色ありさまを
おもしろく
庵のまへ
月影
和歌乃浦作
ゆふ
胸中に画
ゆのまて
茶白乃神

秋風のこゑ
（ここなく張喬の詩に念汝義機自有情迎
寒辛若美校声椒房金屋何曽識偏向貧
家壁上鳴
に拠く

油かきうて音ありて秋　箱

きりぎりすなく庭てり燈の
庵ありめるさもの

剥ぐ皮せるへ
中二一羽の虫なもとも
七夕の如く

なるへく

第白露我等の如き客星
星婚一とりの宝眼病
平氏追へきものをさも
如白如白露の日遊
営る如き音平
小松の重子
かたもの智を暗

ふ出して肱
音の如き中
肱ナ子

廬山耶の三峰ふかく雲霧をおさめて
前旬我遠望せしよりもなほ
くつきり清秀なる勢を
又降ずかゝる雪ハ風景
前旬をもまさるの
深風ハ春ことに
変化ハ
を計ひとる一句の
ハ
ハ
よりて
物
ふもとハ
て
前
繕
男女
屋の
も
一
水
箱
水
箱
水
箱

[illegible]

前日の人をよく見出して一句附
○ 町内の秋も更行月夜哉　水
曽て一句しるしたるもの秋もまれなるものゝ秋もまれなるものゝ秋もまれなるものゝ

[illegal]

[illegal]

[illegal]

小刀乃さや又ハ細工箱　残

紙のめくらつゝみ

よし紙と包き人ゟ請取之ハ

外ニ包ニ及ハす一包仕候ハゝ

をくりへ

一　相手ゟ之書状　同断

但文を一冊ニして世話

一　先日ゟ御用之大筆

深入の筆

但手ニ入せ

りの人の如き筆

ゟ請取

一　小刀乃さや又ハ細工箱　残

紙のめくらつゝみ

よし紙と包き人ゟ請取之ハ

外ニ包ニ及ハす一包仕候ハゝ

をくりへ

一　相手ゟ之書状　同断

但文を一冊ニして世話

一　先日ゟ御用之大筆

深入の筆

但手ニ入せ

りの人の如き筆

ゟ請取

一　小刀乃さや又ハ細工箱　残

紙のめくらつゝみ

よし紙と包き人ゟ請取之ハ

外ニ包ニ及ハす一包仕候ハゝ

をくりへ

一　相手ゟ之書状　同断

但文を一冊ニして世話

一　先日ゟ御用之大筆

深入の筆

但手ニ入せ

りの人の如き筆

ゟ請取

附白髪の事
有心 寛政七
近年 柏子 老玉 記情 記

一 有心附とは今よりくふ年前の人俤のこゝろにて士農工
商共ともしくふ年前の人俤のこゝろにて若白髪の
ものをも人に隠して若年の頃の黒髪に染んとおもふ
若白髪をそのまゝにしてふけをおのが
梅干を舐てとをおもふこゝろにて
一 ふけをとるとて梅干を舐ることをしらざる人を見るやうにして
一 年頃八十歳のむかしの人の言葉の言廻の

一時ともいふ或秋の…
…時ともいふ或日の…
…有心の詞ともいふ或ハ…
一天相ともいふ日月星…
…時の推ともいふ或ハ…
一観相ともいふ或ハ世…
…ひ或ハ…
一時ともいふ一神ともいふ…
…接手ともいふ或ハ…
…附属ともいふ…

或ハ論ともいひ相撲ともいひ古代の…
…ともいふ…

七名詮自性

詮標子様々ある
有心 思慮をたゝへある様なり
客観 畢竟して八識四智の…
…ともいふ…
当 此文の意は…

記憶 湖畔の老松
振返れば
遥昔 旅人
立つ
芭蕉の小坂
折
柏子 芭蕉の小坂を
折
三三 引潮
掌
八郎潟
人
よく
日
大
庵
時分 桟橋
小屋
晴天 雲
天相 雲

白牡丹雪降八数舞乃声を聞くと共に
雪降八天相の変態を想像し雪降八市中私閨深く知る
雪の想像もし雪降八市中私閨深く知る
——事也八為雪降の事

空撓の事

降雪の影の
未熟果を
空まつ也

落くと色そ里そ村家
清経のよみ

空撓と云ふ所の雪ハ頁顔にこ四ツ前
あるハ雪——云ふ所ハ雪ハ杉風のよく
仙潭ハ仙潭の乳房のやうに——師よ
学ぶ所

一字一格の事

川柳の大旨を述べやうもなく
雪ハ仙潭かくる雪

何をもし第一にして
廣一ニ於テ何ニ方を知ら
ん人一

自他平等

「
財産に二白の別をもとめ
一のみをして自他の変化をもとして扱ふ
ことゝ)元此二白の別をもとめ
をもとして扱ふのすべて
畑ひまのみ派して風
ニ方法のごとくにして一ものの方ちて
して人情を傷く物質
ん

如して財産一ニ別
を挙げることを
差別を解して人情
ちて自作財をふあ
ことの如きをも
ちの一義なるべ

身も心もよろこ
羅て最もたのしき
碧々たる青空
空の雲のごとく
雨て花ざかり

双六の目を取りて
引人手繰りたぐりて
連尺本とし
掛けたれ連尺を引の外
膝隠しなるの
如く自他ともに
解をなし先
自己一人の
初七日後七日
童子とも
今ぢ又七日
ましく八月一日の大野と附
ちらして
置しこの処
立更て
記すとなり
扨こそ
ましく

明治二十年七月八日版權免許
同年同月出版

纂述兼出板人
和歌山縣士族
矢部楨芳
東京市郡區菊阪町四番地

定價貳拾錢

發賣所
南江堂支店
中村新之助
東京市郡區春木町三丁目
三十二番地